

手首に造設したシャントの状態確認が必要なため、常時の見守りが可能な本体ホームに転居し、生活の支援をしました。この他にも、肥満、糖尿、高血圧、痛風など生活習慣病を指摘されている利用者も少なくなく、食事内容の見直しを行いつつありますが、利用者の希望と反するものがあり、理解を得ることは難しい状況となっています。

一方で、法人のダンスパフォーマンスチームに参加した最高齢の利用者は、仲間に迷惑をかけたくないとの思いから自ら断酒し、体調管理に努めました。仲間とのつながりや目標を持つことで自律的な生活ができることを学んだケースでした。

企業で働く利用者は、交友関係が狭く休日を1人で過ごすことが多く、生活が乱れがちなところもあります。今年度は、仲間づくりのきっかけを意図し、育成会の催しやきずな会、メープル主催の行事等への参加を積極的に呼びかけましたが、単独行動に慣れている利用者の参加は少数でした。利用者が望むホームでの暮らしを継続するためには、住環境の見直しと共に健康維持のため心身両面からのアプローチが不可欠であることを再認識し、次年度も継続して取り組みを進めていきます。

【居宅介護事業所 大阪市手をつなぐ育成会】

居宅介護事業所は港区を拠点に、「港区内ヘルパー事業所連絡会」に参加する等、より地域に根差したサービスの向上を図りました。

28年2月から始めた行動援護事業の充実を図り、利用者の確保や登録ヘルパーに資格取得を促し、行動援護のサービスの提供が出来る登録ヘルパーの確保に努めてきました。その結果、利用者が11名、ヘルパー9名とサービス提供責任者5名が行動援護の資格を取得し、より質の高いサービスが提供できるようになりました。

一方で、サービス提供水準を維持・向上するため、必要に応じてサービス提供責任者がヘルパーに同行し、実際のサービス提供の状況確認を行うとともに、改善点を提案するなど細かなアドバイスをを行いサービス向上に努めました。

また、効率の良い事務処理の方法や、職員間でのサービス内容の検討等、情報共有の時間を多くとれるよう工夫しました。

【大阪市西部地域障がい者就業・生活支援センター】

大阪市西部地域障がい者就業・生活支援センターは、大阪市内24区の7圏域のうち、港区、此花区、福島区、西区、大正区の5区を担っています。

センターの主な役割としては、就職を希望している障がいのある方、あるいは在職中の障がいのある方やご家族が抱える不安や困りごとに応じて、雇用・労働及び福祉の関係機関等の協力のもと、就業支援担当者と生活支援担当者が協力して、就業面及び生活面の一体的な支援を実施しています。

また、現在障がいのある方を雇用している企業および事業所、雇用を検討されている企業及び事業所に対する支援も実施しています。30年度では当センターとして、①個別支援の重視・徹底、②相談スキルの強化、③情報発信と共有を3つの柱を目標にして、事業運営に当たりました。

【福島育成園】

福島育成園は、生活介護(定員80名)と施設入所支援(定員40名)の障害者支援施設です。

10月より生活介護事業の定員100名を定員80名に変更し、施設入所支援の定員40名として運営を行いました。平均利用者数75.5人、施設入所支援は平均利用者数28.7人、短期入所事業の平均利用者数は4.0人で事業を実施しました。

生活介護では、個別支援計画をもとに、快適に活動に参加することができるよう、食事提供、排泄、身だしなみなど、個々に合わせた支援を行いました。利用者の希望に添えるような活動として、クラブ活動としてエアロビクス、書道、クラフト、陶芸、健音体操などを月に1回実施し、充実感を得る機会を提供しました。日中活動については、障がいの重い方でも取り組みやすく、出来上がりが分かりやすいボルトナットの組立作業を取り入れました。さらに毎週月曜日を「納品とドライブの日」とし、マイクロバスを使用しての外出の機会を提供し、行き先を東成育成園や港第二育成園とするなど、施設間での交流を行うと共に、気分転換になるような取り組みを行いました。

自主製品として取り組んでいるクッキー製造を毎週火曜日に行いました。月1回地域で定期的に行われる、海老江地区コミュニティーセンターのふれあいサロンで販売や地域の方々や食事を共にするなど交流を重ね、区内で行われている他のサロンでも自主製品のクッキー等を販売するなどして福島育成園を知ってもらえる機会となりました。

一方、施設入所支援では、安心安全に過ごすことができるよう、入浴、食事、排泄、着替えなどの日常生活を快適に過ごせるように支援をする一方で、栄養ケア計画を作成し健康管理に配慮した食事の提供を行う等、個々に対応する支援をしました。